笑顔で送る仲間達に、この時ばかりは、さすがの蔵馬も殺意を覚えるのだった。
※
※
※
そこまで思い出すと、軽くため息をつく蔵馬。

（上手いこと言いくるめられた・・・・というよりも、からかわれているのだろうか。）

確かに仲間内じゃあ、女っ気はないと思いますよ？
しかし、君らが生まれる何百年も前に、俺はそういうことを一通り堪能してますからね？
いろいろ知っているので、今は別にいいんですから。
うん、うん、そうですよ。もういいんですよ、本当に。いいんですけど・・・ね。

そう思いながら、横目で麻弥を見る。

（今更・・・封印した恋を、蒸し返すような真似なんて・・・）

なんとなく、変な気持ちになってしまい、先程より大きめにため息をつく蔵馬。

「やっぱり・・・迷惑だった？」
「え！？」

その声でようやく現実にもどされる。
言った相手を見れば、不安そうに自分を見つめていた。

「本当は・・・忙しかったんじゃない？私、けっこう強引に誘っちゃったし・・・幽助君の手前・・・無理しちゃった？」
「え？いや、俺は別に～」
「ごめんね・・・。南野君、今までの同窓会も全然来なかったじゃない？」

麻弥の言う通り、昔の知り合いが集まる会などには行かない。
実際、今ある妖怪・人間関係があれば、それ以上は必要ないと思っていた。
人付き合いを避けていた頃の人脈など、今さら再構築したいとは思わない。
そんな俺に麻弥は言葉を続ける。

「今年は私も、同窓会幹事メンバーになったから、どうしても来てほしくて・・・。」

「すまなかった。確かに俺は、不参加の常習犯だもんな？」
「違うの！南野君は悪くないよ！私だって、君が参加しない理由を、なんとなく・・・わかってたもの。」
「え？」
「南野君・・・昔から、人の集まる場所が苦手だったじゃない？」
「麻弥。」
「だけど・・・幽助君と笑いあう南野君を見て、どうしても来てほしくなったの。南野君は気づいてないかもしれないけど、すごく君は変わったよ。」
「それは・・・」

（俺も自覚はしている・・・）

飛影はもちろん、幽助や桑原君・・・特に、幽助が俺を変えたと思っている。
人間の母親のために命を捨てようとした俺よりも、そんな俺に付き合って一緒に命を捧げようとしてくれた男。
酔狂と言うには度が過ぎていて、見ていて危なっかしいのに、一緒にいて楽しいと思った。
【戦う】ことを【喧嘩】と言って楽しむ姿が新鮮だった。
その人柄に触れ、心地よさを知って、互いを信じ合うという感情を知った。
失いたくないと、大切だと、初めて心から思える仲間達に出会えた。
友達という馴れ合いだけでなく、刺激しあえることで深まっていく絆が俺達にあった。
今まで得ることが出来なかった本当の【ダチ】というものが、俺を大きく変えたのだろう。

“すごく君は変わったよ。”

的を得ている麻弥の言葉で、物思いにふける蔵馬。
そんな蔵馬の様子で何か察する麻弥。
そして、様子をうかがう形で彼女はさらなる言葉を紡ぐ。

「高校が別々になってから、南野君に何があったか私にはわからない。だけど、今の南野君を見ていたら、きっと良い意味で変われる友達がいるんだってことがわかったわ。」
「・・・そう、だね。」

いるよ。
賑やかで、楽しくて、手がかかるけど、頼りに出来る仲間達が。

「それなら、もっと南野君には、良い顔で笑ってほしいの。」

「え？」
「昔は、思春期とかの関係で、みんなと距離を置いていたけど・・・・今会って話してみれば、絶対良い友達になれると思うのよ！」
「麻弥・・・・？」

友達もそうだが・・・思春期って？

（この子は、俺が人間特有のホルモン現象が原因で、みんなと距離を置いていたと思っているのか・・・？）

きっとそうなのだろうと蔵馬は思った。
なぜなら、自分を見る麻弥の顔がとても真剣だったから。
そして、どこか悲しそうな眼をしていたからだ。

「本当はすごく面倒見の良い優しい人だって、私だけが知ってるんじゃなくて、みんなにも知ってほしいの！１人で笑うより、みんなで笑っている方が、何倍も楽しいんだよ・・・？」

その言葉で、彼女の悲しい目の意味を知って胸が痛んだ。

（・・・そこまで、俺のことを心配してくれていたのか・・・。）

俺のことなんて、もういいのに。
お前は、お前のことだけ考えればいいんだぞ？

「みんな、南野君のことを誤解しているから・・・だから、このチャンスにその誤解を解きたいの！」
「俺は別にいいよ、麻弥。そう思われても仕方ないことを、今までしてき・・・・」
「だったら、なおさら変えようよ！？南野君が幽助君と仲良く出来ていたみたいに、もっと誰かと笑いあっていてほしいもん！その方が絶対に、楽――――！」
「みんながみんな、同じことをして楽しいとは限らない。」

高まった麻弥の声を、遮りながら蔵馬は言う。

「『みんな一緒』、『みんな同じ』という考え方は、人間の・・・いや、日本人の性格上、賛否がわかれる感情の１つだ。良くも悪くもどちらとも受け取れるものだが、個人の自主性、マイノリティーを殺してしまうという点で、俺は好きじゃない。」

「南野君・・・！」
「・・・・心配してくれているのは、わかっている。でも俺は、そんなにたくさんはいらないよ。俺をわかってくれる相手は、少しだけで良い・・・。」
「・・・ごめんなさい。」

自分の言葉がお節介だったと項垂れる麻弥。
そんな麻弥を見て、キツイ言い方になってしまったと反省する蔵馬。

「ごめんね、私・・・昔っから、余計なことばっかりして。」
「それこそ、麻弥の方が俺よりも面倒見が良いからだよ。気にしないでくれ。」
「本当に・・・・同窓会に来てよかった？私がうるさく言うから、嫌々来たんじゃないの？」
「まさか？どうしてそんなことを言うんだ？」
「だって、さっきから、イライラして・・・怒っているみたいじゃない？」

そうつぶやくと、泣きそうな声で言う麻弥。

「もしそうなら、キャンセルとか大丈夫だよ？私はただ、本当に・・・南野君と同窓会に行きたかっただけで・・・だけど、それで、南野君が嫌な思いをするなら、私・・・・！」
「そんなことないよ！ちょっと仕事で、いろいろあった（冷やかされた）だけなんだ！・・・・・君が、落ち込む理由はない・・・。」
「そっか・・・・なら、いいんだけど。」

そう言って黙り込んでしまう２人。
気まずい状態のまま、自然とその足取りも遅くなる。